

精神科臨床における初診時の向こう側 —治療者の関心—

Beyond the first visit in clinical psychiatry
- interest of therapists -



ただしメンタルクリニック(院長) 田中 禎 Tadashi Tanaka

◆はじめに

ここ数年、精神科臨床の現場ではさまざまな新薬の登場に呼応するかのように世間の関心が高まるなか、双極性障害や発達障害についての過剰診断の問題が取り沙汰されるようになった。一方、アルコール依存症に関しては、臨床現場において、まだまだ過小診断の傾向が否めない。専門家側からは「専門病院に入院してくる患者は重症や末期に属する方で、一般科で多くの軽症の患者が見過ごされている」との指摘もなされている。過剰診断と過小診断とを比べると、それぞれに問題はあるものの、広く関心をもった結果、過剰診断に陥ることと、関心が向かないことで過小診断に陥ってしまうことでは、後者の方により問題意識を感じてしまうのはアルコールの専門家の常かもしれない。なぜなら、一部のうつ病患者がその背景のアルコール問題が見過ごされたり軽視されたりすることにより、病態を複雑にし、予後を悪化させることは多い。また患者に限らず、その家族のアルコール問題が軽視され、見過ごされることにより、事態が不必要に複雑化、悪化しこじれてしまっているケースも後を絶たないからである。そのような状況をふまえて、初診の場面において、目の前の患者だけでなく、その周囲に治療者が関心を向け、必要に応じてさまざまな形で介入することは目の前の患者を援助する上でも大変有意義なことと考える。これらのことはアルコールの専門家にとって自明の理ではあるが、あらためてその重要性を感じた症例を経験したので、ここに報告する。

症例1 30代、女性

生活歴および現病歴

同胞2名中第2子。幼少の頃から、父はアルコールをよく飲んでいて。父方祖父母と両親、姉との6人で暮らしていた。祖父も父も暴言は日常的で、すぐ手が出る方だった。祖母は60代で他界。その後、祖父は認知症になり、X-1年4月に90代で他界。姉は学校の成績が悪いと祖父に殴られたりもしていた。姉が中学で不登校になり、母が姉にかかりっきりになったため、母に対して腹が立ち、母の作ったものを食べないこともあった。小学6年から不登校になり、中学2年生の時に拒食症となった。その時に心療内科に1回ぐらい行ったかもしれないが、よく覚えていない。当時、母にかまってほしいと思っていたが、ある時そんなことをしてはいけぬ、もっと家の外に目を向けようと思いはじめると、中学3年生の時に自然に拒食症は治まった。通信制の高校を卒業し、デザインの専門学校に進んだ。卒業後、インテリア関係の仕事を経て、26歳からホテルで結婚式のビデオを撮る映像関係の仕事に就いた。29歳で警察官をしている男性と恋愛結婚。31歳の時に退職し、長女を出産。33歳の時に長男を出産。現在、夫と二人の子どもと暮らしている。両親は60代で、父は警備員、母はパートをしており、未婚で引きこもっている姉と実家に3人で暮らしている。